

**第3部**  
**全体報告会**  
**パネルディスカッション**

## 【全体報告会・パネルディスカッション】



●コーディネーター 村田 武一郎 (奈良県立大学 教授)

●パネリスト 田端 和彦 (兵庫大学 教授)

大谷 新太郎 (阪南大学 准教授)

横山 葵 (NPO法人「人と自然とまちづくりと」理事長)

(順不同・敬称略)

**村田** まず、各分科会の成果について報告ください。

**田端** 第1分科会では、都会から過疎地まで様々な地域での再生、活性化について検討、議論しました。都会での取り組みは2件。1件目は大阪市内の廃校小学校をNPOの方々を中心となり、地域住民や自治会などを巻き込んで校庭を芝生化し、本来学校が持っていたコミュニティの場を再生しました。2件目は堺市内の旧堺港を再生させる取り組みですが、もとは市が中心となってグループを作り、そのグループがやがて住民や地元経済界の人々が関わる住民組織となったのが特長です。現在は再生から一歩進んで、環境をテーマとして活性化を目指しています。一方、中山間地域での取り組みは3件。1件目は奈良県高取町の「町家の雛めぐり」で、地域の固有資源を活用した地域づくりの代表的な例です。この取り組みで気づかされた大切なことは、単にお客さんが来てくれたからそれによしとするのではなく、どういう方が来てくれて、それが町のためになっているかどうかを分析しておられる点でした。2件目は奈良県の東部中山間地域における工房街道づくり。現地では人材や食事、宿泊、交通などの問題があり、苦勞も多いながらも、プロの方だけでなく、今まで趣味でやっていた方やリタイアされた方が工房をやってみたい、というところからスタートし、地域と工房を結んだ1本の工房ロードにしていく、という活動です。最後は兵庫県丹波市にある空き家の改修で、関西大学と市が連携協定を結んで長期的に関わっていくという取り組みです。どの取り組みにも共通する課題は、今後どうやって活動を持続させていくかということです。これらの5つの地域は歴史や住民、産業構造もまったく異なりますが、「地域の中で自分たちが持っている文化を伝えていきたいという住民のパワー」と「コーディネーター的な立場のキーパーソンが必要である」という点では共通しています。

**大谷** 第2分科会では観光と地域文化について5団体がそれぞれの活動を発表、議論しました。1件目は、地域資源を生かした観光によって内発的なむらづくりをしようという奈良県山添村の事例。2件目は「近木川再発見からまちづくり」という発表で、極めて水質が悪い川を、子どもたちが遊ぶことができ、



◀田端 和彦氏



大谷 新太郎氏▶

環境学習できる川に育てていくとともに、地域の人々の関心を高めていくという取り組みです。そこで指摘されたのは、行政はサポートはしてもコントロールはすべきではない、ということでした。3つ目は京都の「鴨川を美しくする会」。40年以上もの長い間、活動が続けてこられたのは、関わっている人たちが義務感を持たず、やめたければいつでもやめられる、といったスタンスだったからこそで、それで自然と実績が積み上がってきた、というお話が印象的でした。4つ目は「なら・まちづくりコンシェルジュ」。行政の実務担当者である“コンシェルジュ”と、実際のまちづくり組織が協働でマップ作りをしたという事例報告でした。最後は、個人的な活動からスタートして、やがて5つのグループと一緒に活動するようになった「御前浜・香櫨園浜里浜づくり」。今の体制になったのは最近ということで、本格的な活動はこれから、というところですよ。5団体の発表を聞いて思ったのは、まずは地域の方々自分たちの持っている資源は何なのかを考えることがきっかけとなった、ということ。地域住民が自主的に一歩踏み出して着実に実績を積み重ね、周りの人、あるいは外部の人も巻き込んで今の形につながってきた、という点で共通しているのではないかと思います。

**横山** 第3分科会では地域協働について発表、意見交換しました。まずは神戸市の「獅子ヶ池を美しくする会」。産業廃棄物で荒れ果ててしまった池を自治会や婦人会、小中学校のPTAや子どもたちが連携してごみ撤去から始めた、という取り組みを報告されました。おかげで池はきれいになり、今は里山づくりに関わり始めているそうです。2件目は福井県の「つるがまちづくり萩の会」。川沿いの萩の植樹活動を通して、心なごむ花と緑と水辺のまちづくりを目指す取り組みです。活動が続けていくにはやはり資金が必要ということで、廃品回収などをして地道に資金を稼いでいるとのことでした。3件目は加古川の草木で草木染めに挑戦している「草木染KAKOGAWACOLOR」。草木染めにふさわしい水ではない汚れた加古川で、こうした自然のものを取り扱う活動を行うことで、自然環境を取り戻していく活動に広がっていけば、との願いが込められた報告でした。4件目は羽曳野市内を流れる飛鳥川を通して自然の大切さ、生き物の尊さを学ぼうという1人の大学生の取り組みで、母校の小中学校に「生き物クラブをやりませんか」と呼びかけたことから活動がスタートしました。たった1人で4年間、活動が続けてこられたのですが、今年3月からは周囲の環境団体とネットワークを作りながら環境づくりの活動を広げていくそうです。最後は和歌山県印南町の切目川を生かしたまちづくりということで、切目川エコクラブ事務局の方からの報告です。ホタルの幼虫を飼育して川に放流したり、ドングリを育てて植樹したりといった活動を通じて、子どもたちに自然の大切さを伝えていこうというのが目的ということでした。これらの発表を受けて討論会を行った結果、自分たちが頑張ってい



◀横山 葵氏

村田 武一郎氏▶



ば周りも行政も必ず見ていてくれて、支援の輪が広がり、同じような活動をする団体も生まれてくるということ、そして、こうした活動は自然体で頑張り過ぎないことが大切ではないか、という結論に至りました。

**村田** 発表された団体の方にも、活動を継続していくコツなどをお聞きしたいのですが。

**草木染 KAKOGAWACOLOR** まず、自分が一番好きなものからスタートすれば、人との出会いがありますし、苦勞を苦勞と思いません。さらに、勇気を出して行政の方とも関わるようになれば、助けてくださったり、知恵を出してくださったりもしました。また、市民の意識向上については、私たちの作品を具体的に説明し、キャッチコピーをつけて販売すれば、川に足を運んでもらえるのでは、と期待しています。そして本当に力を出してくれた人たちには寄付をすることで、意識革命を図っています。

**村田** 普通の主婦であった前田さん(草木染 KAKOGAWACOLOR)は、もともとは「草木染め」の才能やリーダーシップという能力を持っていたのだけれども、それを発現するチャンスが長い間なかった。しかし、地域と関わって、自らのポテンシャルに気づき、それを発現していくうちに、周りの人たちも触発され、さらに次世代が育っていくという、素晴らしい循環が生まれているのですね。

**近木川流域自然大学** 活動を継続させていく上で強く感じるのは、昔の地域で遊んでいく中に子どもの文化が存在しているということです。それを目の当たりにして、これほど大きな力はないと思っています。近木川流域自然大学は貝塚市の施策計画の中に踏み込んで位置付けされていますので、どんどん広げていきたいと考えています。

**関西大学 TAFS 佐治スタジオ** 都会育ちの大学生が現地に長期滞在しながら住民と一緒に地域課題や魅力の発掘に取り組んでいます。地域再生というものは、1年や2年では答えが出るものではありません。大切なのは学生が現地で色々な経験をしていく中で、自分の職能、学んだことが地域社会でどういうふうにかされるのか、身を持って感じることです。今の社会にそれらが発揮できる仕組みはないのですが、10年、20年先に彼らが社会の中心世代となって活躍するようになった時に成果が出てくるのではないかと期待しています。

**村田** 大学で理論を教えるだけでは、社会的に役にたちません。体験から学び・考える能力を身につけさせる必要があります。中山間地域に学生を張りつかせる関西大学の試みは重要ですね。

**山添村づくり協議会** 今、奈良県立大学の学生さんがうちの村に来られて、村の弁当を作ろうという試み





をされています。村には色々な観光資源がありますが、それをどう商品化していくかというアイデアがあれば、もっと可能性のある地域じゃないかな、と思います。大学が持つ様々な分野のノウハウを、こうした地域で教育のフィールドとして使っていただければありがたいです。

**村田** 私のゼミの方針として学生に言っているのは、「本を読むな、読む以前に現地へ行け」ということです。なぜなら、地域づくりについて本に書かれていることは成功した経過と結果のみだからです。途中段階での「ひと」の役割や苦難、失敗とその分析が書かれることは稀です。本を読んで、結果を知ったところで、地域づくりの本質はわかりません。

私のゼミでは、四季折々の山野草、野菜が豊富な地域に、「大宇陀研究室」を設けています。そこへ学生が行って、地域の人に教えてもらい、2年かけて、伝統的な季節料理をまとめた冊子を作りました。そこで学生は、経験したことがないことにも挑戦する機会を得ました。怒られることもありました。逃げずに最後までついていきました。これは彼らが社会に出た時におおいに役に立つでしょう。地域の伝統文化を残すためには、地域の人自分たちでそういった本を作るというノウハウがありませんので、この部分を我々でカバーし、両方がうまく「共働」し合えたら、その地域に次世代へと引き継ぎ得るものができていくのではないのでしょうか。

**田端** うちの大学でも中山間地域の淡路島に学生を行かせて調査させているところです。福祉の世界でアウトリーチという言葉がありますが、大学が持っている資源をいかに地域に出していくか、ということとは非常に重要なことだと思います。

**村田** 会場におられる方で何かご質問はありますか？

**獅子ヶ池を美しくする会** 獅子ヶ池の活動をしている中で思うのですが、山での仕事ですから疲れます。お茶ぐらいは用意するのですが、行政の方からはお金はまったく出ません。赤字の中でやっているわけなんです。活動費用をねん出するにはどのようにすればよいのでしょうか。

**村田** 活動費に充てる小銭をどう稼ぐかという問題ですね。例えば、ドラム缶を山へ持って行き、風呂を沸かして入ってもらう、湧き水を沸かしてお茶やコーヒー、みそ汁を作るといったような体験ツアーを、参加費をいただいて実施してはいかがでしょうか。

**田端** スポンサーを募るという方法もありますね。

**チーム御前浜・香櫛園浜里浜づくり** 「小銭を稼ぐ」ということに関しての質問ですが、行政はどういう視点で予算を組んでいるのか、そしてその予算を私たちはどのように引っ張り出せばよいのでしょうか。



**事務局** 行政の方も予算は非常に厳しいのが現状ですが、観光地域づくりということで関係省庁が連携して皆さんを支援しようという動きはあります。財団の助成金もありますので、一度応募されてみてはいかがでしょうか。

**田端** 行政は公益性と公平性があるかどうかを重視しますから、ご自分たちの活動がどれだけ公益性があるのかというところから考えていただくのも1つのヒントだと思います。

**事務局** なかなかお金は出せないのですが、手は出しますし、汗も出します。各事務所、出先機関に地域活性化窓口を作っていますから、一度訪ねてみて下さい。

**横山** 助成金に頼るとするのは先行き不安定ですので、やはりいかに自分たちで小銭を集めるかを検討される方が現実的ではないかと思います。お金がないと活動はできませんから。

**大谷** 地道にコツコツと着実に活動されることで、人が集まり、さらにまた人を呼ぶことになります。その中で何か特異な才能を持っている人材が出てくると、また活動の質が高まります。そんな流れがうまく機能しているところでは、地域づくりがうまくいっているのではないのでしょうか。

**田端** 今はソフトの時代。きっちり分けないんです。村田先生が言われた「新たな公」というのも、まさに行政と民間、NPO、ボランティアが行っている様々なサービスが融合して新しいサービスを生み出す、あるいは新たなサービスの担い手になるということなのではないかと思います。

**村田** 本日、ご参加いただいた皆様には、「先走りするバカ」でありつつ、コーディネーターとしての能力にもさらに磨きをかけられ、これからも地域の人たちのますますの参加を促され、実績を積み重ねていかれることを期待しています。

#### 【コーディネーター・プロフィール】

##### ◆村田 武一郎（むらた ぶいちろう）

奈良県立大学教授。

1949年石川県生まれ。

神戸大学工学部建築学科卒業後、地域・都市計画のシンクタンクを経て、2000年から奈良県立大学教授に就任。この間、1995年に大阪大学で博士号を取得し、現在に至る。

関西文化学術研究都市、国際花と緑の博覧会、大阪湾ベイエリアの開発整備、大阪湾の環境保全・創造、阪神・淡路大



震災からの復興などに関する計画、近畿各地の振興計画などに従事。

奈良・もてなしの心推進県民会議会長、奈良県国土利用計画審議会会長、奈良市開発審査会会長などの公職多数。

一方で、奈良のむらづくり協議会代表幹事、地域づくり支援機構理事長など、地域の人々と「共働」しながら、各地域の地域発展に尽力している。

最近の著書に、『地域の時代を創る－地域発展と「ひと」の役割－（編著）』、『新版 海域環境創造事典（共監編著）』、『海の科学（共監編著）』等がある。

#### 【パネリスト・プロフィール】

##### ◆田端 和彦（たばた かずひこ）

兵庫大学生涯福祉学部社会福祉学科教授。1964年三重県生まれ。広島大学大学院生物圏科学研究科博士課程後期修了。学術博士。1993年に広島大学助手、1995年、兵庫大学講師、同大学経済情報学部経済情報学科准教授を経て、2008年に生涯福祉学部発足により現職。

専門は地域経済学、地域政策論、地域福祉。2007年まで兵庫県の外郭団体である（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構地域政策研究所で主任研究員を務め、地域再生や競争力向上に関する研究にもあたっている。

著書に『参画と協働－理論と実践』ほか、また論文に「地域の産業創発の国際比較」、「地域の競争力向上とガバナンスのあり方」などがある。

##### ◆大谷 新太郎（おおたに しんたろう）

阪南大学国際コミュニケーション学部国際観光学科准教授。1974年富山県生まれ。立教大学大学院観光学研究科観光学専攻博士課程後期課程修了。七尾短期大学専任講師を経て現職。

専門は観光産業論、観光情報論。特に情報通信技術が観光者、観光産業、観光地に与える影響に関心を持つ。

和歌山大学観光学部非常勤講師、総務省地域情報化アドバイザー、日本観光研究学会関西支部幹事、立教大学アミューズメントリサーチセンター（観光プロジェクト）特別研究員。

主な著書に『観光事業論講義』（共著）、『観光実務ハンドブック』（共著）などがある。

##### ◆横山 葵（よこやま あおい）

NPO法人「人と自然とまちづくりと」理事長、NPO法人「ミナミまちづくりフォーラム」理事、（有）エイライン代表取締役。技術士（総合技術監理、都市及び地方計画／道路）。

まちづくり、道路設計、公園設計、建築計画、景観デザインの仕事のかたわら、まちづくりや環境団体の活動促進やネットワーク・交流の企画、コーディネート、行政との橋渡しなどを行っている。NPO法人「人と自然とまちづくりと」では、人と自然が、人と人が心豊かに共存できるまちづくりを軸に、環境の創造・再生を行う活動に取り組んでいる。